吹田市立博物館
SUITA CITY MUSEUM

すいはく博物館だより
No.35

平成20年度（2008年度）秋季特別展

ビールが村にやってきた！

平成20年（2008年）10月11日（土）～11月30日（日）

「大日本婦人會吹田市吹田第二支部麥酒班」旗（アサヒビール株式会社蔵）

ビールは幕末に西洋から伝わり、輸入品から国産品への過程を経て、大いに普及し、現在では洋酒という枠に分類されない独自のジャンルを形成しています。

明治20年（1887）頃、世界のビールはドイツで生まれた低温下面式発酵（はっこう）型が主流となり、その生産に大規模な設備と資本の投入が始まりました。

日本でも明治24年（1891）、有限責任大阪麦酒会社（現アサヒビール株式会社）が「純国産のドイツ式ビールの醸造（じょうぞう）」を理念に、近代的工場を吹田村に誕生させました。神崎川の水運や鉄道などの輸送手段、江戸時代から酒造に用いられた良質の水、吹田の地にはビール造りに適した条件が揃っていたのです。

戦前まで「ビールの町」として社会的経済的に大きな影響を受けた吹田。近代ビール醸造の歴史を振り返りながら、吹田の近代化の歩みをたどります。

（藤井裕之）

吹田にあった麦酒町

今回は10月11日から開催する秋季特別展「ビールが村にやってきた！」に関連して、アサヒビール吹田工場の近くにあった麦酒（びーる）町のお話を、アサヒビール株式会社ＯＢの柴山照夫さんからうかがうことにしました。

柴山さんのお宅は代々アサヒビールにお勤めになっておられたとうかがっていますが。

（柴山） 私は昭和３年生まれで、祖父の代から三代にわたりアサヒビールに勤めていました。祖父は江坂の寺内で生まれ、明治22年の麦酒会社創業当時から勤めています。社宅には父親の代から住み始め、私は社宅で生まれました。昭和28年に借家にしていた自宅に引っ越すまで、ずっと父親といっしょに社宅に住んでいました。

社宅があったのはどのあたりですか。

（柴山） 社宅があったのは阪急電車の吹田駅のあたりで、阪急電車の線路を挟（はさ）んで西側と東側にありました。西側は今のメイシアターと阪急電車の線路の間の駐輪場のあたりで、東側は今の駐車場とテニスコートのところです。戸数は70～80軒。住んでいた人は300～400人といったところでしょうか。社宅には職員用と工員用がありました。職員の社宅は、メイシアターの南側のあたりと米田の酒屋さんのあたりで、全部で12～13軒ありました。社宅は昭和35、36年頃まであったと記憶しています。

今、お話がでた社宅があった場所が通称「麦酒町」といわれていたところですね。

（柴山） 社宅の住所は麦酒町で通っていましたね。正式な住所は線路の西側が吹田市3114番地。東側は吹田市2561番の１と２でした。だけど、米穀（べいこく）通帳や戦争中の配給物は、みんな麦酒町で通っていました。

麦酒町という名前で聞いているおもしろいエピソードがありますよ。戦争中、招集されて入隊する時、ここらは大阪の八連隊になるんですが、入隊したときには住所を自己申告しなければならないんです。で、ある人が「吹田の麦酒町の○番地です。」と申告すると「そんな町名があるのか。」と言って、びんたされたそうです。それでも「そういわれても麦酒町です。」と答えたという話を聞いています。

それほど、麦酒町の名で通っていたんですね。社宅の家の配置や間取りはどのようなものだったのでしょう。

（柴山） 木造１階建てで、家は４軒続きが２列になっていて、８戸が１つのブロックになっていました。そして、道路を隔てて向かいにも同じブロックがあるという配置でした。間取りは玄関、３畳、６畳、６畳、台所、押入、便所、５～６坪の庭がありました。風呂はある家とない家がありました。水道は全部ついていました。便所はくみ取り式で、くみ取り屋さんに来てもらっていましたが、畑の肥料にもしていました。

大正期の麦酒町界隈（現在の泉町）　（写真提供／アサヒビール株式会社）

畑があったのですか。

（柴山） メイシアターのところに会社のグランドがあり、戦争中、物資が不足してきたので農園になりました。各戸に10坪ぐらいずつ区切って割りあてられていました。ダイコン、キュウリ、ホウレンソウ、トマトなどを作っていました。戦争中は食べ物も少なかったので、子どもたちが昼間目星をつけておいたトマトなどを夜に食べにいったりといったこともありました。

麦酒町の町の組織はどのようになっていたのでしょうか。

（柴山） 麦酒町には町会があり、町会長がいました。町会長には工場の庶務（しょむ）課長がなることになっていましたね。戦争中は配給品が多く、そのための券をよく配っていました。連絡事項などは町会長の家に隣組の組長が集まり、町会長から伝達されていました。

隣組というのもあったのですか。

（柴山） 町会の中には隣組というのがありました。近所12～13軒ほどを１つの組として８つの隣組がありました。各々１組、２組というように番号で呼ばれていましたね。

隣組にも組長はいたのですか。

（柴山） 組長はいました。任期は１年と決まっているのですが、話し合いで決めるため、続けてなる人が多かったですね。私の父もずっと組長や会計をやっていました。隣組では寄り合いがしょっちゅうあり、各戸の人が組長の家に集まっていました。組長が町会長から受けた伝達事項をそのときに各戸に伝えていました。集まりは常会といっていました。ですから回覧板というのはあまり使っていませんでした。

隣組の人たちのつきあい方はどのようなものでしたでしょう。

（柴山） 生活の基盤は隣組にありました。組の誰かが入院したりすると、ご飯を作ったり、子どもの世話など助け合って親切でした。夫婦げんかの仲裁もよくしましたね。組内で子どもが生まれたらお祝いをしたりして、家族同様のつきあいをしていました。

新しく引っ越して来た人は隣組にあいさつする決まりになっていました。

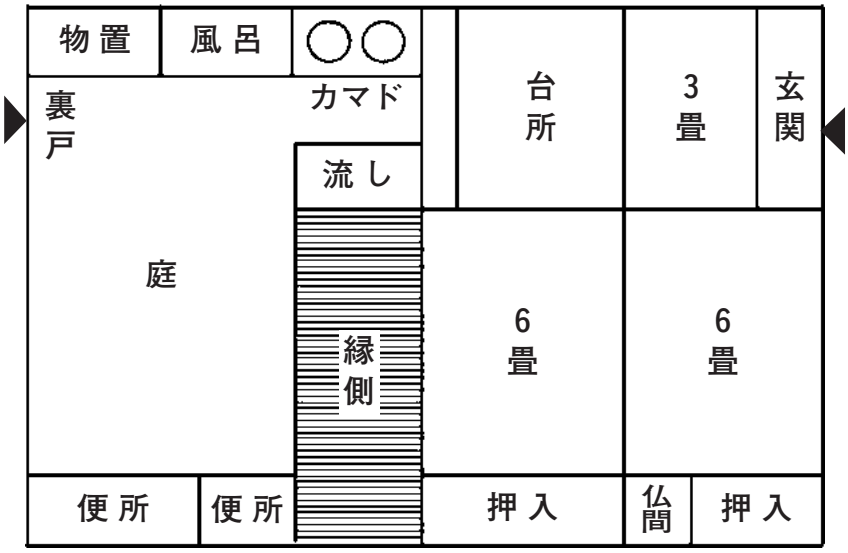
町会や隣組では何か行事をしていましたか。

（柴山） 町会では会社主催ですが、運動会を会社のグランドでやっていました。隣組では暮れになると集まって、餅つきをよくしていました。春には千里山の遊園地へ弁当を持って歩いて花見にも出かけました。山田のゴルフ場へハイキングにも行きましたよ。それから私のいた隣組では、女性や子どもが年１回演芸会をしていました。

社宅の中には会館のようなものはなかったのですか。

（柴山） 会館はありません。会社のクラブや工場長の社宅で生け花教室などはしていましたね。それが代わりということでしょう。工場長の社宅は元旭クラブのところにありました。

まさに職住近接ならぬ隣接で社会組織や活動も会社との関連性が見え隠れして、おもしろいお話を聞くことができました。今日はどうもありがとうございました。　（聞き手　藤井裕之）



社宅間取り図

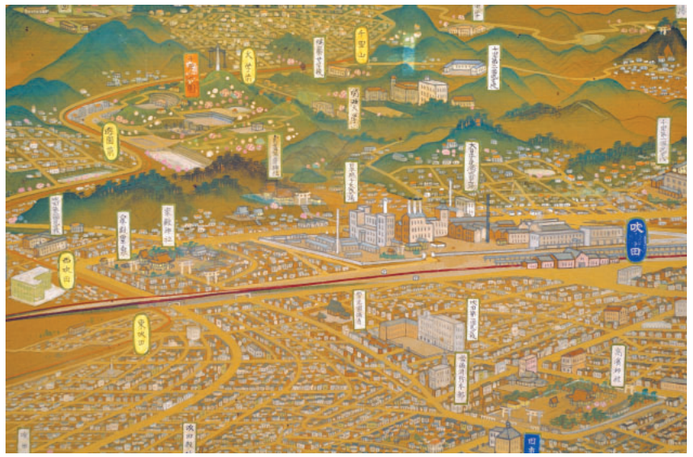
大阪吹田村醸造場之図（『Asahi Beer』より）（アサヒビール株式会社蔵）

吹田村醸造所

煙を噴き出すボイラー室の煙突。煉瓦造りの重厚な工場が、農村だった吹田村の鉄道の駅前に誕生したのが明治24年（1891）。汽車の車窓から見られる近代的な煉瓦造りの建物はビールの味だけでなく、見る人の心を西洋の世界へと誘っただろう。

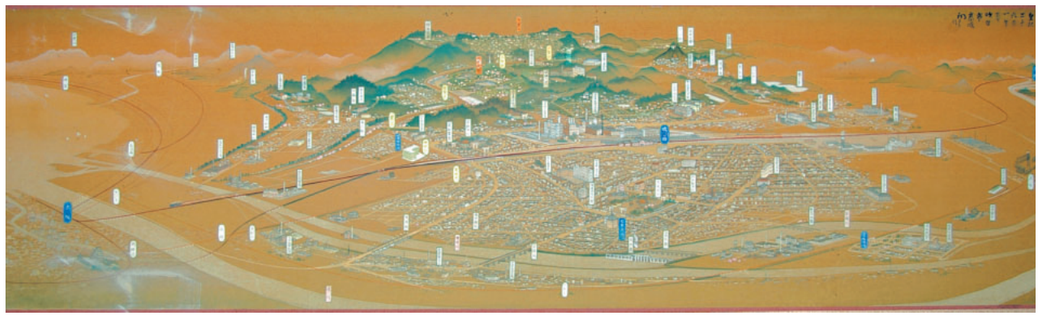
注目はそれだけじゃない。工場の周囲にはできたビールをのせた馬車が、工場をとりまくようについた線路の軌道上を行き、門の外では牛が荷車を引いている。おそらく、高浜橋付近にあった船着き場に、荷造りさせた製品を運んだのだろう。

吹田にもあった吉田初三郎の鳥瞰図

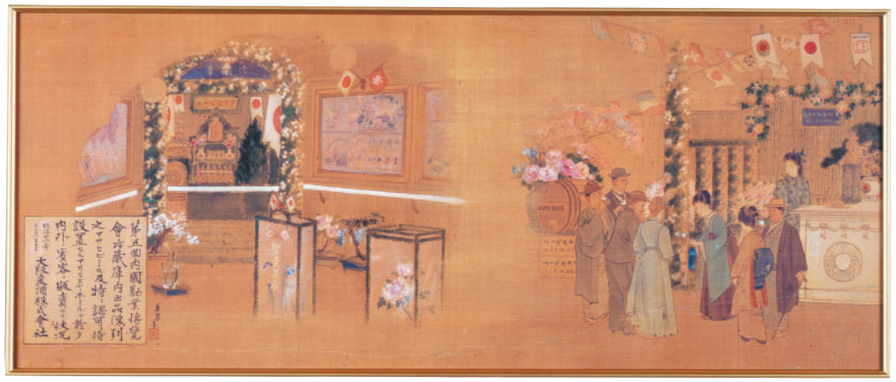


吹田鳥瞰図（現アサヒビール吹田工場付近の拡大）

大正から昭和にかけての鳥瞰図の大家といえば、いわずとしれた吉田初三郎。吹田にも初三郎の鳥瞰図があった。この図は吹田市が誕生した翌年の昭和16年（1941）に描かれた。麦酒工場が中央に大きく描かれ、神崎川沿いでは晒し工場などの工場群が御旅町に描かれている。吹田の工場は麦酒だけとは限らない。



吹田鳥瞰図（全体）（当館蔵）



第五回内国勧業博覧会ビール陳列及びビアホール之図
（アサヒビール株式会社蔵）

川崎巨泉と大阪麦酒

おもちゃ絵で知られる川崎巨泉だが、大阪麦酒の絵馬や内国勧業博覧会の関連図を多く描いている。巨泉の義父は師匠でもある浮世絵絵師の中井芳瀧である。大阪麦酒会社を創業した堺の蔵元鳥井駒吉は,広告のデザインに堺に住まいした浮世絵師の芳瀧を起用したのだ。巨泉はそのあとを継いで大阪麦酒で多くの絵を描くことになる。

第四回内国勧業博覧会出店図（『Asahi Beer』より）
（アサヒビール株式会社蔵）

大阪麦酒会社のふるさとはヴァイエンシュテファン醸造所

大阪麦酒会社の初代技術長兼支配人の生田秀がドイツ式ビールを学んだのはドイツ、ミュンヘンのヴァイエンシュテファン醸造学校。西園寺公望から紹介された教授のアドバイスなどによるものであった。留学先では森鴎外などの他の留学生とも交友を深めている。

醸造学校の前身は、世界最古の修道院による醸造所だ。現在はミュンヘン工科大学になり、醸造所も存続させ、見ることはもちろん、直営のビアガーデンでビールを楽しむこともできる。

醸造所直営のビアガーデン

ミュンヘン工科大学

（文／藤井裕之）

アサヒビール吹田工場（ゲストハウス）との連携事業

今回、連携事業を行うアサヒビール株式会社吹田工場を紹介します

吹田工場は明治24年（1891）に完成したアサヒビールの発祥の地で、アサヒビールでは最も古い工場です。工場内にはゲストハウスがあり、工場見学とビールの試飲が楽しめます。

ゲストハウス入口前では総赤煉瓦づくりであった工場の壁の一部を移設したモニュメントや工場の煙突の先端部分で市民にとっては吹田を代表する景観のひとつでもあった、通称「兜（カブト）」が出迎えてくれます。

工場の見学では会社の取り組みを紹介する映像、ビールの原料となる麦芽やホップの展示、ビール製造の仕込み、発酵（はっこう）・熟成（じゅくせい）、濾過（ろか）といった各工程やびん詰・缶詰の製造ラインをみることができます。また、品質管理の重要性や再資源化展示コーナーでは、製造過程でできる副産物や廃棄物の有効利用の紹介もあります。このようなビールの知識に触れたあとはお楽しみ、工場できたての生ビールの試飲によってその鮮度を実感できます。

連携事業を実施する５日間には両施設を結ぶシャトルバスも運行いたします。バスをご利用いただき、１日で２つの施設を楽しめるこの機会をお見逃しのないようにぜひご来館ください。

（藤井裕之）

吹田工場竣工当時の煉瓦の壁面
（写真提供／アサヒビール株式会社）

連携事業 講演会・シンポジウム「吹田とビール」

月　日	テ　ー　マ	講　師	会　場
10月25日（土）	「近代日本のビール醸造所建築 －大阪麦酒吹田村醸造所－」	川島智生氏（建築史家）	アサヒビール ゲストハウス
11月８日（土）	「現在のビール造り－嗜好の変化－」	入江亮一氏 （アサヒビール吹田工場醸造部長）	吹田市立博物館
11月15日（土）	シンポジウム 「とりあえずビール！ ビールをめぐる世界の景観」	共催 総合地球環境学研究所	吹田市立博物館
11月22日（土）	「世界の酒とビール －伝統的酒つくりの類型－」	石毛直道氏 （国立民族学博物館名誉教授）	アサヒビール ゲストハウス
11月29日（土）	「風土と酒」	佐藤洋一郎氏 （総合地球環境学研究所教授）	アサヒビール ゲストハウス

＊詳細は最終ページをご覧ください。

シャトルバス時刻表

10月25日（土）・11月22日（土）・29日（土）

アサヒビールゲストハウス発
11：15～15：15　毎時15分発

吹田市立博物館発
11：45～15：45　毎時45分発

11月８日（土）・11月15日（土）

アサヒビールゲストハウス発
10：45～14：45　毎時45分発

吹田市立博物館発
11：15～15：15　毎時15分発

＊イベント参加者以外でも展示観覧者の方はご利用いただけます。

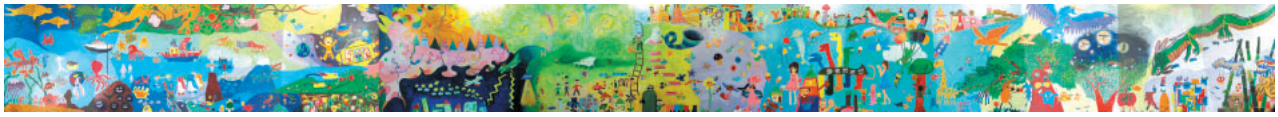
吉志部神社の火災と復興

焼失前の吉志部神社本殿

吉志部（きしべ）神社本殿は、平成20年（2008）5月23日に放火によって、全焼してしまいました。この本殿は、慶長15年（1610）に建てられ、神をまつる部屋が七つとなるように、柱と柱の間隔を七間（ま）とする七間社（しちけんしゃ）の流造りの、全国でもほとんど例がない社殿で、国の重要文化財に指定されていました。残念ながら、この火事によって、指定は解除されてしまいました。現在、神社と氏子さんの努力によって仮殿を建築中で、9月末には完成し、10月17日には例年通り、どんじ祭が行われます。また、焼失した本殿が建てられて400年目にあたる平成22年（2010）までに、新しい本殿をもとのすがたで復旧することをめざして、神社や氏子さんの奮闘は続きます。

博物館では文化財保護係を中心に、被災して傷んだ梁や柱の整理や境内での保存に協力、また保管する資料の提供や各種調査を行い、復旧復興が予定通り進み、学術的にも評価される本殿となるよう支援をしていきます。（小山修三）

トンネルアート、ついに完成!!



トンネルアート南壁全体図

博物館の平成18年度（2006年度）春季特別陳列「千里ニュータウン展」展示実行委員会の委託を受け、名神高速道路下トンネルの出入り口壁面に絵を描いてから３年あまり。今年の夏休み最後の日、壁画が完成しました。大きさは高さ４ｍ（作画部分は3.5m）、長さ約40m。昨年完成した北側とあわせて、すばらしい空間ができました。

「21世紀の夢を描こう＊祭りつどい踊り」をテーマに原画を公募し、採択された原画をもとに、アーティストと子どもたちから大人までが協力しながら制作しました。今年の作成には子ども140人、大人75人がかかわり、完成式には延べ100人を超える人が集まりました。

内容は春夏秋冬と季節が移り変わっていくという構成になっていて、右にその一部を紹介します。

（文／小山修三・写真／奥居　武氏）

左1／4部分

画面上は「アニマルフレンズ」、下半は左から「海の女神のお出まし」「行こう僕たちも」「海賊船に乗って」「富士のお山をひとっ飛び」

中央右1／4部分

上は左から「夢の国ではもう秋だ」「夢の国の使者たち」、下は左から「にゃんこのリズム」「みんなで踊ろう」「四頭だての竜に乗って」「カエルのパラシュート」「虫の病院」

「ビールが村にやってきた！」関連イベント

講演会

10月13日（月・祝）　午後２時～３時30分
「ビール醸造技術の移入と
近代日本ビール業の成立」
藤井裕之（当館学芸員）

10月19日（日）　午後２時～３時30分
「アサヒビールの赤レンガ建物」
藤原　学（当館学芸員）

11月９日（日）　午後２時～３時30分
「思い出のビール造り」
夜久亢宥氏（吹田商工会議所会頭）

11月23日（日）　午後２時～３時30分
「ドイツにおけるビール消費の歴史」
南　直人氏（京都橘大学教授）

＊いずれも博物館講座室　先着120名　聴講無料

博物館トーク

10月12日（日）　午後２時～３時
「酒屋の息子のひとりごと」
小山修三（当館館長）

10月26日（日）　午後２時～３時
「吹田にあった麦酒町」
柴山照夫氏（アサヒビール株式会社OB）
藤井裕之　（当館学芸員）

＊いずれも博物館講座室　先着120名　聴講無料

展示解説

10月18日（土）・11月16日（日）
午後２時～３時（10月18日は観覧料が必要）

見学会

11月3日（月・祝）　午後２時～３時30分
アサヒビール大山崎山荘美術館
現地集合・現地解散
（JR山崎駅・阪急大山崎駅）
定員20名（多数抽選）
申し込み締切　10月22日（水）必着
※ハガキまたはファクシミリに「見学会希望」として、参加者全員の住所、氏名、電話番号を書いて当館まで。

木曜日はビールテイスティングデー

10月23日・30日（11時～15時）
ビールの劣化と鮮度の味比較

10月16日・11月６日・13日・20日・27日
（11時～15時）
さまざまな種類のビールの味利き
会場　ロビー（観覧料が必要です。）

平成20年度文化庁芸術拠点形成事業「吹田とビール」

10月25日（土）　午後１時30分～３時
「近代日本のビール醸造所建築
ー大阪麦酒吹田村醸造所ー」
川島智生氏（建築史家）
アサヒビール・ゲストハウス（講演後工場見学、試飲）
定員125名（多数抽選）
※申し込み締切　10月14日（火）必着

11月８日（土）　午後１時30分～３時
「現在のビール造りー嗜好の変化ー」
入江亮一氏（アサヒビール吹田工場醸造部長）
博物館講座室　先着120名　申し込み不要
おみやげ付

11月15日（土）　午後１時30分～４時
シンポジウム
「とりあえずビール！
ビールをめぐる世界の景観」
総合地球環境学研究所との共催
コーディネーター：内山純蔵氏
（総合地球環境学研究所准教授）
「ヨーロッパ」鳩澤　歩氏（大阪大学准教授）
「アメリカ」ダニエル・ロング氏
（首都大学東京准教授）
「中　国」槙林啓介氏
（総合地球環境学研究所研究員）
博物館講座室　先着120名　申し込み不要
おみやげ付

11月22日（土）　午後１時30分～３時
「世界の酒とビールー伝統的酒つくりの類型ー」
石毛直道氏（国立民族学博物館名誉教授）
アサヒビール・ゲストハウス（講演後工場見学、試飲）
定員200名　（多数抽選）
※申し込み締切　11月11日（火）必着

11月29日（土）　午後１時30分～３時
「風土と酒」
佐藤洋一郎氏（総合地球環境学研究所教授）
アサヒビール・ゲストハウス（講演後工場見学、試飲）
定員125名（多数抽選）
※申し込み締切　11月18日（火）必着

「吹田とビール」申し込み方法
ハガキまたはファクシミリに「希望講座名」、参加者全員の住所、氏名、電話番号を書いて当館まで。

●開館時間
午前９時30分～午後５時
●休館日
月曜日、祝日の翌日
12月29日～１月３日
http://www.suita.ed.jp/hak/

吹田市立博物館だより　第35号
平成20年（2008年）10月５日発行
吹田市立博物館
〒564-0001
吹田市岸部北４丁目10番１号
TEL.06（6338）5500
FAX.06（6338）9886

この冊子は、4,000部作成し1部あたりの単価は47円です。